

# 「弱いきずな」による援助

成 富 正 信

## 序

人びとが日常生活上の種々の問題や悩みに対処していく過程において、身近な他者が与える援助はきわめて重要な役割を果たしている。この点に関心をもつ社会学的研究の多くは、「第一次集団」(C・H・タリー)の文脈に沿って進められてきた。すなわち、家族、親族、隣人、友人などから構成される第一次集団の援助機能を重視してきたといえる。一方、より新しいアプローチであるソーシャル・ネットワーク分析は、第一次的ではない関係をも含む「関係の連鎖(ネットワーク)」に着目して、このネットワークの特質が援助のやりとりや援助の質と密接に関連するという観点をとっている。なぜそのような観点をとるかといえば、第一に、現代社会における生活問題は、第一次集団の内部資源による援助だけでは対処できない特質をもつようになってきているからである。また第二に、第一次集団に典型的な強い援助規範や動機づけに支えられた援助が、援助の受手にとっては必ずしも最良の援助にはならないという事態をも視野に入れようとするからである。

本稿では、「第一次集団」とは区別される「ネットワーク」概念の意義を考えるために、援助追求行動 (help-seeking behavior) の研究における「弱いきずな (weak ties)」をめぐる議論に焦点をあててみたい。しかしまず最初に、「弱いきずな」が問題になってくる状況を具体的にイメージするために、筆者の身近なところで起きた二つの事例を取り上げてみる。

## 1

### 事例1

A子は四十歳を過ぎたばかりの主婦であり、三人の中・高校生の子供がいる。彼女は家計の補助のために、ずいぶん前から自宅近くの会社で經理の事務をしていた。自分はパートなのだが、仕事の内容や労働時間は正社員と全く同じであった。会社からは経験豊富ということで重宝がられたが、低賃金であり、休暇その他の保証もなく、労働条件はよくなかった。とくに、残業が多くて、受験期を迎えている子どもへの面倒をみてやれないのが最大の悩みであった。そこで職業安定所や就職情報誌で職探しを試みたが、いま以上に適当な職は見つからなかった。そんなおり、彼女の父親から、自分の勤務先の知人で、經理の経験者を探している小さな会社を知っている人があるという話を聞き、早速その会社に連絡をとり、面接してもらうことになった。その結果、正社員として採用すること、定時退社の厳守、新卒社員の指導を行うなど、条件面での折り合いが付き、その会社に勤め先を変えることになった。また、面接のとき、父親とその会社の社長が同郷人であることがわかり、そのことも採用にあつ

て有利に働いたようである。

## 事例 2

B子は、二人の就学前の子どもをもつ主婦であるが、下の子どもは生まれつきの障害をもっている。この子の定期健康診断のために、ある病院の小児科に通っていたが、主治医の勧めで、その病院の関連施設でやっている障害幼児のための家庭指導グループに参加することになった。そのグループで、自分の子どもとは違う障害をもつ子どもの母親のC子と知り合いになった。二人は、月一回の指導日に顔を合わせたとき、子どもの成長や暮らしぶりについて語り合ったが、それ以上のつきあいをする機会はなかった。B子は、自分の住んでいる地域で、音楽療法の指導者や専門の保母に協力してもらって、同じ障害をもつ子の保育の会を作っていた。ある日C子から、「自分の子どもも地域の自主保育か訓練の会に入りたいのだが、B子さんの会に入れてもらえないか」という内容の電話がかかってきた。二人の住んでいる所は同じ市内ではあったが、B子たちの会の活動場所にC子が通うには遠すぎるし、また子どもの障害の種類も違っていたので、参加してもらうのは少し無理かなとB子は考えたが、とりあえず音楽療法の指導者を紹介することにした。この指導者とC子がいろいろな話し合った結果、音楽療法に関心をもつ何人かの親に呼びかけて、あたらしい自主訓練の会を作って活動することになった。

この二つの事例では、第一次的とはいえない関係が重要な意味をもっている。第一の例では、A子の転職したいという動機と、経理担当事務員の補充という会社のニードが結びつく過程で、「父親」―「父親の知人」―「知人の知っている会社」という関係の連鎖を通して流れた情報が、決定的な役割を果たしている。A子は父親の知人をあらか

じめ知っていたわけではない。また父親はA子の転職の問題を、とくに切迫したものと考えてはいなかったようである。A子にとって価値ある就職情報は、彼女からみれば間接的で、強い援助の意図をもたないきずなから得られたのである。

第二の例では、B子とC子のつながりが重要である。両者は、ともに障害児をもつという点での親近感をもち、また親として子どものために積極的に何かをしたいという動機をもっていたが、とくにお互いに助けあったり友だちづきあいをする仲ではなかった。しかしこのきずなが、専門家の援助を得て新たな自主訓練会が形成されるきっかけとなったのである。

転職や自主訓練会の形成という社会現象を説明しようとするとき、ふつうクローズ・アップされる要因は、求職者の動機づけ、企業のニーズ、職業紹介機関やマス・メディアが提供する情報、子どものよりよい成長を願う親の態度やニーズ、保育機関の専門家による援助活動などである。たしかにこれらの要因を欠くことはできない。しかし同時に先の二つの例でみたように、現象をより正確に理解するには、人びとの関係の連鎖、とりわけ間接的な関係や当事者が強いコミットメントをもたない関係にも目を向ける必要があるのである。

## 2

ソーシャル・ネットワーク研究の主流を占めるパーソナル・ネットワーク分析では、個人の行動を、その個人を中心として拡がる関係の構造によって理解しようとしてきた。その場合、ネットワークの構成単位である二者関係(dyad)

を分析する変数としては、関係の制度的文脈、強度（または親密度）、接触頻度、持続性、対称性（または互酬性）、多重送信性（または役割関係の重複度）などが用いられてきた（成富、一九八二年参照）。このうち関係の強度をとくに重視し、それがネットワークの構造化と深い関連をもつことを指摘したのはグラノベッターである。ここで彼の議論をやや詳細に紹介しておきたい（Granovetter, 1973, 1983）。

グラノベッターの基本的アイデアは、「小規模な相互作用が大規模なパターンへと転換され、それがさらに小集団へとフィードバックされる」過程を理解する鍵が对人的紐帯の「強度」(strength)にあること、つまりこの概念をミクロ現象とマクロ現象を架橋する媒介概念として活用することである。彼はまず「強度」を次のように定義する。「紐帯の強度は、時間の量、情緒的な強さ、親密度（相互信頼）、その紐帯を特徴づける互酬的サービスの（おそらく一次の）組合せである。それぞれは明らかに高い内的関連性をもつけれども、ある程度他から独立している」(Granovetter, 1983)。さらにこのダイアディックな紐帯の強度をより大きな構造に関連づける仮説が、おおよそ次のように説明される。

仮にA—B、A—Cというダイアドが存在するとすれば、A—Bおよび（または）A—Cの関係が強ければ強いほど、BとCが結びつく確率は高くなる。なぜなら、強い関係はより多くの時間量を伴う傾向があるからである。つまり、AがB、Cそれぞれと一緒に過ごす時間が多ければ多いほど、BとCと一緒に過ごす時間、あるいは出会う機会が多くなり、したがってBとCが相互作用し、関係を創出する確率が高くなると考えられる。また親しい友人関係は類似性をもつ人間同士の間で生じやすいという経験的証拠からみて、A—B、A—Cの関係が強ければ、Aと類似性をもつB、Cも互いに類似している可能性が高く、そのためBとCが出会ったときに、両者が友人になる可能性も高

いといえる。

この仮説が正しいなら、 $A-B$ および $A-C$ の関係が弱ければ、 $B$ と $C$ が相互作用する可能性は低く、また相互作用しても親しい友人関係を結ぶ可能性は低くなるという仮説もまた成立するはずである。この仮説を基礎にして、グラノベッターは、より大きなネットワークにとって弱い紐帯がもつ意味を検討する。結論的にいえば、ネットワーク内のすべての二点間の唯一の通路を与える線であるブリッジは、すべて弱い紐帯であること、あるいは、どんな強い紐帯もブリッジではないということである。なぜなら、 $A \cdot B \cdot C$ というトライアドがあつて、 $A-B$ が強い紐帯であるとする、もし $A-C$ が強い紐帯であれば、 $B-C$ が存在する可能性が高い。その場合、 $A$ と $B$ の間の通路は、 $A-B$ と $A-C-B$ の二つが存在することになるので、 $A-B$ はブリッジではない。もし $A$ が $A-B$ 以外に強い紐帯をもっていなければ、 $A-B$ がブリッジとなる可能性があるが、より大きなネットワークにおいては、ある人がただ一つしか強い紐帯をもたないという可能性はきわめて低い。一方弱い紐帯は、そのような制限なしにブリッジになりうるのである。

もっともより大きなネットワークにおいては、特定の紐帯が二点間の唯一の通路であることは実際にはまれであり、多くの場合二点間の最短ルートを与える「局地的」(local)ブリッジとして作用しているといえる。ではこのブリッジの機能とは何か。「 $A-B$ 間のブリッジは、それに沿って情報や影響力が、 $A$ の接触相手から $B$ の接触相手へと流れ、したがって $A$ と間接的に結びついている人から、 $B$ と間接的に結びついている人へと流れる唯一のルートを提供する」(p.1364)。つまり、弱い紐帯はブリッジとして機能することによって、情報や影響力を、より多くの人に、より大きな社会的距離を越えて普及させる可能性が高いのである。

次に、以上の仮説がエゴ中心的ネットワーク（パーソナル・ネットワーク）研究に与える意味について検討しよう。エゴが強い紐帯で結ばれた親友を何人ももっていれば、その親友同士もまた相互に関係をもつであろう。つまりエゴを中心とする友人のサークルは、高密度に編まれたネットワーク構造をもつ。一方、エゴが弱い紐帯で結ばれた知人を何人ももっている場合、この知人たち同士はお互いに知り合いではないだろう。この知人たちも、エゴと同様にそれぞれ自分を中心として、高密度に編まれた友人サークルをもつであろうが、それはエゴの友人サークルとは異なったサークルである。このような関係のネットワークを考えてみれば、エゴと知人との弱い紐帯は、二つの高密度構造をもつ友人サークルを連結する重要なブリッジであることがわかる。したがってこの弱い紐帯が存在しない場合には、二つのサークルが結びつく可能性は低いであろう。

エゴの友人たち同士が親しい間柄である場合、エゴは同じ情報を何人も友人から聞いたり、すでに知っている情報を繰り返し確認したりすることになりやすい。一方、ブリッジである弱い紐帯は、エゴが知らない人、あるいは直接接触したことのない人との間接的接触のルートとなる。このルートは、エゴにとって未知の情報や影響力、最新の考え方や流行などが流れてくるチャンネルとして機能しうる。なぜなら、弱い紐帯で結びついている知人は、エゴの社会的世界とは異なる社会的世界に出入りしている可能性が高いからである。それゆえ、弱い紐帯をもたない人は、自分の狭い世界内でのみ通用する情報やものの見方に「閉じこめられ」(encapsulated)、自分とは社会的に距離のある情報源、あるいは自分の友人サークルを越えた世界の知識から孤立しがちになる。

この「弱い紐帯」の仮説を経験的に検証するために、グラノヴェッターは彼自身が行った転職者の研究の例をあげている (Granovetter, 1974)。アメリカの職業移動研究においては、転職者がパーソナルな接触を通して新しい職をみつ

けるという特徴がすでに指摘されていた。これを常識的に解釈すれば、より親しい人（強い紐帯）ほど、相手を援助しようとして強く動機づけられるので、就職情報を提供する機会も多いはずだと考えられる。しかしグラノベッターが、ボストン郊外で、専門職・技術職・管理職の転職者を対象に行ったサンプリング調査の結果は、この解釈とは異なる傾向を示していた。すなわち、調査対象となった転職者が新しい職の情報を得た当時、その情報の提供者と接触していた頻度別の割合をみると、頻度の高いもの（最低週二度）一六・七％、中位のもの（年一度から週二度）五五・六％、低いもの（年一度以下）二二・八％であった。つまり、接触頻度で紐帯の強さを定義する限り、強い紐帯より弱い紐帯の方が、価値ある情報チャネルになる傾向があった。また情報提供者の多くは、大学の旧友、昔の同僚、新しい雇用主などであり、彼らと転職者との出会い、偶然会合で一緒になったとか、両者の友人の介在によるものであった。つまり、「人びとは、その存在そのものを忘れていた人から、決定的に重要な情報を受けている」(Granovetter, 1973, p.1372) のである。

この調査結果は次のことを示唆する。つまり、援助の強い動機づけ以上に、弱い紐帯、およびそれが作りだす関係の連鎖という関係の構造的特性を、エゴにとって価値ある援助の入手を左右する要因として重視しなければならないということである。

### 3

ソーシャル・ネットワーク分析が提起した一つの論点は、規範的（文化的）変数と関係的（構造的）変数のどちら



が人びとの社会行動をよりよく説明できるか、ということである（成富、一九八三年参照）。本稿の文脈でいえば、援助規範とネットワーク構造のどちらが実際の援助行動のより適切な解釈を与えるか、ということである。グラノベッタの議論はこの点について重要な示唆を与えている。しかし対象とした事例が転職行動（すでに職に就いているものがよりよい職を得る）であり、しかも援助の内容が就職情報の提供に限られているので、より複雑な対人援助行動を扱うには、彼の議論だけでは不十分である。例えば、失業状態にある場合には、職に関する情報を得ることともに、職に就くまでの間、生活財の援助を誰に求めるかが問題となる。また慢性疾患患者が、入院して治療を受けるべきか、それとも在宅で療養した方がよいのかの判断に迫られているような場合には、フォーマル（専門的）な援助とインフォーマル（非専門的）な援助のどちらを主にすべきかという選択の問題に直面しているといえる。

そこで次に、複雑な問題を含んだ援助追求行動をソーシャル・ネットワーク分析の観点から研究している例として、ホーウィッツの研究を取り上げてみたい（Howitz, 1977）。彼が主題としているのは、地域精神保健センターで現在治療を受けている患者が、どのような経緯で来所することになったかという問題である。

精神的困難を抱えた人が、精神医療の専門機関を訪れるまでの過程にはさまざまな要素が絡んでいるが、従来の研究では、当事者やその周囲の人びとの精神医療に対する態度や精神医学的問題に関する知識（あるいはその正確さ）を最も重視してきた。つまり正確な知識と好意的態度をもつ人ほど、短期間のうちに、問題が重度化しない前に治療を受けるようになり、また入院する場合でもその決断は自発的に（社会統制的機関によってではなく）行われると考えられてきたのである。また知識や態度はその人の属する社会階層の従属変数とみなされてきたので、これまでの研究は、主として援助追求行動の階層差（したがって文化的態度の差）を明らかにすることに力を注いできたのである。

しかしより最近になって、文化的態度よりも相互作用の構造的パターンに焦点をあてた研究が現れてきた。ホーウィッツは、「それらの研究を統一する概念は、ソーシャル・ネットワークである」(p.88)とし、さらにこれまでのソーシャル・ネットワーク研究が明らかにした援助追求行動に関する知見を、次の二つの命題にまとめている。(1)「インフォーマル・ソーシャル・ネットワークの成員間に強い結合が存在する場合、その内部でのソーシャル・サポートと統制が強くなり、フォーマルな精神医療機関の活用にはあまり頼ろうとしない可能性が高い」。(2)「相互に結びついていない一定数の人びとと結びついている人ほど、フォーマルな精神医療機関を利用する可能性が高くなる」。

第一の命題は、主としてこれまでの親族ネットワーク研究から導き出されたものである。高密度に編まれたネットワークは、内部資源による成員同士の情緒的、物質的な相互援助を強めるが、そのことは同時に成員同士の統制も強まることを意味する。この二つの面で、外部のフォーマルな援助機関への依存は弱められる。第二の命題は、開放的な友人ネットワークが外部の社会機関や情報源への通路を与えることを明らかにした研究の結果に基づいている。開放性の高い友人ネットワーク、すなわち互いに知り合いでない(したがって異なる活動領域の)友人を多く含む友人ネットワークをもつ人は、自分がこれまで利用する機会や知識をもたなかった社会機関に関して、そうした機関を利用した経験のある人やその機関についての情報をもつ人に会おう可能性が高い。

ところで、ホーウィッツ自身の関心は、この二つの命題をそのまま検証するのではなく、両者の統合化を試みることである。なぜなら、従来の研究は、親族ネットワーク、または開放的な友人ネットワークのいずれかを対象としており、両者の関連性そのものはあまり問われてこなかったからである。そこでホーウィッツは、親族ネットワークの強度と友人ネットワークの開放度を組み合わせることによって、親族と友人の両方を含むネットワークの構造的パター

ンが、精神医療機関の利用行動を促進（または遅延）させる要因としてどのように作用しているかを検証しようとする。同時に彼は、文化的態度という要素がこの構造的パターンとどのような関連性をもつかということも検討課題の一つとしている。そこで次に、彼の経験的研究の分析手続きとその結果を要約しておきたい。

ホーウィッツは、親族ネットワークの強度を測るために、対象となった患者自身が一ヵ月間に自分の親族と接触した回数の合計を指標とする。そして月に九回未満を「弱」、九回以上を「強」とする。つぎに友人ネットワークの開放度に関しては、患者に親友を三人まであげてもらい、①「友人なし」＋「友人一人」＋「互いに知り合いである二人または三人の友人」と、②「互いに知り合いでない二人の友人」＋「三人の友人、うち二人は互いに知り合いである」＋「互いに知り合いでない三人の友人」の二つのグループに分け、前者を閉鎖的、後者を開放的とみなす。このような操作化によって得られた二つの変数を組み合わせることで、以下の四つのネットワーク・カテゴリーが構成される。(1)「強い親族集団＋閉鎖的友人ネットワークまたは友人なし」、(2)「弱い親族集団または親族なし＋開放的友人ネットワーク」、(3)「強い親族集団＋開放的友人ネットワーク」、(4)「弱い親族集団＋閉鎖的友人ネットワーク」。

次に、患者が徴候を感じてから精神医療機関に治療を受けに来るまでの過程に介在する問題として、以下の四つを取り上げている。(1)「その徴候が精神的疾患として扱われるべき問題だという判断をしたのは誰か」、(2)「精神医療機関に行くように指示したのは誰か」、(3)「精神医療機関に来た当時、症状はどのくらいの重度化していたか」、(4)「患者が精神的問題があると感じてから、精神医療機関の援助を求めた時までの間にどのくらいの期間があったか」。このうち、(1)と(2)については、判断または指示が、自分・配偶者・親族・友人・仕事仲間のいずれかによって行われた場合を「インフォーマルな判断または指示」に一括して、医者やソーシャル・ワーカー等の専門家によって行われる

「フォーマルな判断または指示」から区別している。ここでの仮説は、インフォーマルな判断や指示が、当事者の文化的態度や知識の正確さによるというより、開放的ネットワークを通路とした精神医療との間接的な関係があることによって可能となるのであり、開放的ネットワークをもたない人は、フォーマルな判断や指示により専門的治療を受けることになるというものである。また(3)と(4)の問題は、先の命題から、親族によるサポートと統制が強ければ、専門家の援助を求める時期は引き延ばされ、その結果症状が重度化してから治療を受けることになるが、親族のサポートが弱く、開放的友人ネットワークをもつ人は、専門的援助を求める時期も早く、それゆえ症状が軽いうちに治療を受けると予想される。この説明が、文化的変数による説明よりも妥当性をもつかどうかを検証されるのである。

分析の枠組は、この四つの問題と、先述したネットワーク・カテゴリー、社会階層、および精神科治療を経験したことのある知人の有無、の三つの変数との関連を明らかにすることである。社会階層は文化的態度や価値を表す変数としてこれまで重視されてきたものであるが、三番目の変数は著者独自のものである。これは、精神科治療の経験者が自分の経験を肯定的に評価しているか、それとも否定的に評価しているかによって、インフォーマルな判断が影響を受けることが分析の過程で明らかになってきたために、変数として取り入れられたのである。

以上のような枠組を用いて、百二十人の外来患者と短期入院患者へのインタビューによって集められたデータが分析されるのである。しかしここではその詳細は省き、本稿の観点からみて興味深い結果のみを紹介しておこう。まず、従来指摘されてきた社会階層差は、どの問題についてもはっきりした相関性が認められなかった。一方ソーシャル・ネットワーク・カテゴリーはいくつかの問題で相関性を示しており、先に述べた仮説を部分的に支持するものであった。すなわち、親族と強く結びつき、閉鎖的な友人ネットワークをもつ人は、インフォーマルな判断や指示とは

無縁であることが多い。このネットワーク・タイプでは、ふつう親族によるサポートが重大な問題以外のすべての問題に対処していけるのだが、しかしその期間が他のタイプより長いということにはなかった。強い親族集団がなく開放的友人ネットワークをもつ人は、当初の仮説のすべてを満たす結果を示していた。つまり、インフォーマルな判断や指示により、最も短い期間で、症状の軽いうちに治療を受ける傾向がみられた。その他の二つのネットワーク・タイプは明確な結果を示していないが、強い親族サポートも開放的友人ネットワークもたない人は、長期間治療を受けないままでいる傾向があった。

しかしネットワークの構造的パターン以上に注目されるのは、精神科治療の経験をもつ知人の存在であり、とくにそのような治療経験者自身が精神医療をどう評価しているかが、患者の行動に影響をおよぼしている点である。ホイッツは、州立病院での治療経験を否定的評価の指標とし、民間や精神保健センターなどの非制度的治療機関での治療経験を好意的評価の指標とする。これを変数として用いた場合、「非制度的な精神医療の方式を経験したインフォーマルなメンバーとの関係をもっている人は、精神科的治療を受けるべき状態であるという判断と治療を受けに行くようにという指示を、インフォーマル・ネットワークのメンバーから与えられていることが多い。このような精神医療とのインフォーマルな関係を欠いている場合には、専門家が問題を判断し、指示を与えていることが多い」(p. 96)。

したがって、精神保健センターで治療を受けるといふ決定が下されるまでの過程を左右する要因としては、患者が治療経験者と関係をもっていたか否か、またその関係はどんな内容のコミュニケーションを与えるものであったかがより重要である。いいかえると、ネットワークの構造的パターンは患者の属する階層に固有の文化的パターンよりも重要な変数であるが、しかしその構造的パターンがインフォーマルな判断や指示の過程に直接関連しているのではな

く、治療経験者に対する当事者の関係的位置（その人のネットワークが治療経験者を含んでいるか否か）、およびその治療経験者がコミュニケーションする内容（精神医療をどう評価しているか）がより重要な説明変数となっていたのである。

ホーウィッツの研究から、われわれは次のような結論を得ることができる。専門機関の援助を求める過程が、弱い紐帯から構成される開放的ネットワークによって促進されるという仮説は基本的に妥当性をもつ。しかし問題はネットワークにどんな種類の人びとが存在しているかということである。とくに専門的援助に関する実際の経験や知識をもつ他者との関係の有無が重要であるが、注意すべきはそれが純粹に構造的な変数ではないということである。なぜなら、経験者が専門的援助に関して伝える情報にはその人の経験的評価が含まれているからである。情報が肯定的評価とともに伝えられるか、それとも否定的評価とともに伝えられるかによって、援助追求行動は促進されたり、阻止されたりすると考えられる。評価的情報それ自体は文化的（規範的）変数である。それゆえ、構造的要素（関係の強度やネットワーク・パターン）と文化的要素（階層規範や経験的評価）のいずれかを一面的に強調するのではなく、両者の関連を問うという視点が必要とされるのである（なお、成富、一九八三年参照）。

#### 4

「弱い紐帯」や「開放的ネットワーク」の研究は、前述した例にみられるように、弱い紐帯や間接的關係がフォーマルな社会機関や第一次集団外の情報源に接近するインフォーマルな通路を与えており、それらの關係を欠いてい

る場合、第一次集団による強力なサポートが同時に外部への援助追求行動を遮断する可能性が高いことを明らかにしてきた。このことは、従来の「第一次集団」論が明確にしてこなかった問題である。「第一次集団」論の意義は、現代の大衆社会における第一次集団の必然的衰退という通説に対する強力なアンチ・テーゼを提起したことにある。しかし現代社会においてわれわれは、家族、親族、隣人、友人などのインフォーマルな関係にのみ依存して生きることができないこともまた確かである。われわれはフォーマルな（専門的な）援助とインフォーマルな（非専門的な）援助を、ともに必要としているのである。この両者の関連を問題にしうるものが、ソーシャル・ネットワーク概念の意義の一つであるといえる。

このような観点から対人援助行動の研究をさらに進めようとするとき、これまでの「弱いきずな」や「開放的ネットワーク」の研究では、いまだ十分検証されていない問題があることに気づく。ここでは、とくに二つの問題に言及しておきたい。

第一に、弱い紐帯や間接的關係がフォーマルな組織と第一次集団を結ぶ通路の役割を現実を果たしているとしても、それらの關係に固有の機能があるのかという問題である。いいかえれば、他の媒体や手段では果たしえない固有の課題 (task) があるのかという問題である。例えば、就職情報や専門的援助機關に関する情報は、マス・メディアやフォーマルな情報紹介機關によっても得ることができると。そうした情報とは質の異なった情報をインフォーマルな弱い紐帯が与えているのかどうか、また与えているとすれば、それは現代社会における人びとの生活にとって、必要不可欠なものなのかどうかが問われなければならない。

あるいは次のようにもいえるであろう。グラノベッターやホーウィッツの研究は、弱い紐帯が与える偶然的情報の

重要性を指摘している。転職を考えている時に、たまたま出会ったかつての知人が教えてくれた情報、また精神的ストレスを感じた時、たまたま同じような悩みを解決した経験のある知人がいたことが重要なのである。そうであるなら、われわれの生活、あるいは現代の社会がそのような偶然的情報に依拠していることの必然的な意味が問われるべきであらう。

この問題に関しては、リトウォクが興味深い論点を提示している (Litwak, 1985)。彼はまず伝統的な第一次集団と開放的ネットワークの特性の共通点と相違点についてふれている。共通点は、「その内部の人びとが、共通の地位や共通の関心をもっていること、メンバーが非経済的な動機づけの形式を活用すること、関係はどのメンバーによって一方的に終結させることができること」(p. 283)である。一方、開放的ネットワークが第一次集団と異なる点は、第一に、それが間接的関係の連鎖によって拡大するために、規模が大きいことであり、第二に、一緒に集まらず中心的調整者もないために、メンバー相互のコミュニケーション行動を通じたプロセスは非常に緩慢だということである。第三に、メンバーは相互に情緒的なきずなをもたないが、しかし非経済的志向性に基づいて行動するということである。それは、第一次的関係と第二次的関係の中間的品格をもった関係である。第四に、全体としてのネットワークの不安定性、つまり、個々の関係が消滅したり新たに形成されたりすることで関係の連鎖の全体が変化するという特性をもつことである。

リトウォクは、こうしたネットワークの構造的特性は、現代社会の機能遂行に必要などんなサービスに「適合」(matching)するかを問題にする。そして、これまでの研究で示されたサービスに共通する基本的特徴を三つに整理している。第一は、フォーマル組織とそれに関わる個人の双方が要求する「非画一的課題」の遂行である。例え



ば、企業が一人のエンジニアを募集し、百人の有資格者が応募してきた場合、二次的な選択規準は同僚とうまくやっていけるかどうか置かれることになる。その場合、パーソナリティの客観的テストといった画一的規準はあまり有効ではない。なぜなら、同僚が候補者をどう評価するかと同時に、候補者が同僚をどう評価するかという非画一的な相互評価が問題だからである。したがって最善の方法は、候補者と同僚たちの両方を知っている人から情報を得ることである。この過程はまた、候補者が職場でうまくやれるかをあらかじめ知るための情報を得る過程でもある。

第二に、規模が大きいことによって最も効果的に遂行されるサービスが存在することである。この点についてのリトウォクの説明は必ずしも明確でないので、ここでは筆者なりの解釈を示しておく。個人のニーズの中には、大部分の人びとからみれば特殊な、あるいは例外的なニーズが存在する。そのようなニーズを満たす専門的機関を設けるとすれば、非常に規模の大きい母集団を対象としなければならない。例えば、百人の利用者がいれば経営可能であるとする、すべての人のニーズを満たす機関は百人の母集団を考えておけばよいが、千人に一人のニーズを満たす機関なら、十万人の母集団を対象としなければ成り立たない。このような特殊なニーズと特殊な専門機関の間には、一般にきわめて大きな社会的距離が存在するのであり、この両者を結びつけるには、規模の大きなネットワークを活用することが効果的であり、また不可欠だといえる。特殊な専門機関のような場合はもちろんのこと、転職の場合でも、転職ニーズが特殊になればなるほど、この規模のメリットは大きくなるといえる。

第三に、弱い紐帯を通じたサービスは、サービス提供者に対して、深く情緒的にコミットメントすることによってのみ満たすことができるような、重大な評価や決断を要求しないということである。またそれは多大なエネルギーを必要とするものでもない。そのサービスが情報の受手にとってどれほど価値があっても、提供者にとっては大した努

力を必要としないサービスだという点が重要である。またそのサービスは時間的緊急性に関わるものでもない。そのような緊急性のあるニーズは、第一次集団、または専門的援助者によって満たされねばならないだろう。

このようなリトワークの整理から、われわれは次のことを読み取ることができる。現代社会は、非画一的な課題の遂行、およびネットワーク規模の大きさが有効に働く特殊なニーズの充足を必要としており、弱い紐帯や開放的ネットワークはそれらに適合的である。また他人には大したことがないと感じられ、しかも時間的緊急性もなく、したがって求めればいつでも満たされるものではないが、しかし自分にとっては重大なニーズを人びとはもっている。そのためまたま出会った他者によってそのニーズが満たされた時、その偶然性は当事者にとってきわめて大きな意味をもつことになるのである。

次に、「弱いきずな」や「開放的ネットワーク」の研究に含まれる第二の問題に移ることにする。すでに指摘したように、これらの研究は第一次集団の外部から得られる情報や専門的援助の重要性を強調する。しかしわれわれの現実の生活は、第一次集団のサポートと外部からの情報や専門的援助の両方を必要としているのである。われわれは、この両方がバランスよく満たされることで生活していけるのである。このバランスがしばしば失われてしまうことは、これまでの研究によっても明らかにされている。問題は、このバランスがどのようにして維持されたり、壊れたりしているのかということである。

この問題は基本的に、対人援助関係におけるジレンマの問題に関わっている。例えば、配偶者のいない母親の置かれた状況について、アルブレヒトとアデルマンは次のように述べている。「配偶者のいない母親たちは、最も非難にさらされやすい集団である。密度の低い構造（開放的ネットワーク——筆者注）は新しいアイデンティティの探求に

とっては有益であるけれども、こうした女性たちは多くの場合、自分の生活を営み、管理していくために、**△**実際のな△援助（すなわち、子どもの世話や物質的必需品）を必要としている。しかし、有形のサポートは高密度に統合された親族関係が支配的な紐帯から得られることが多いのである。家族のメンバーは、配偶者のいない母親の新しい関係には賛成せず、彼女が他人と交際することに対して拒否権を行使する。彼女は、自分の新しい紐帯を断ち切るか、それとも（自分とわが子が資源を依存しているために）貴重な強い関係を危険にさらすかという以外には、ほとんど選択の余地のない状態に置かれる」（Albrecht and Adelman, 1987, pp. 247-8）。

人びとはさまざまな方策を用いて、第一次集団の強い紐帯と外部の世界に拡がる弱い紐帯のバランスをとろうとするだろうし、またそこから生じる緊張を処理していかなければならない。もちろん、第一次集団が外部との関係を作るように積極的にサポートする場合もある。だがしばしば問題となるのは、必要不可欠なサポートが、しかも善意に満ちた家族や親族から与えられることが、結果的に外部との関係を衰退させているという事態なのである。第一次集団と外部に拡がるネットワークとが、たとえシレンマをはらみながらも共存していける条件を探ることは、今後のソーシャル・ネットワーク研究の重要な課題であろう。最後に、この問題を考えていくための一つの例を引用して、本稿を終えることにしたい。

事例（土佐林一、一九八二年、二四―六頁）

二十二歳の脳性まひの大学生の話「大学に入って、健康な仲のよい友達もできて、毎日が大変愉快でした。ある時、その友人の一人から、彼の家に招待されました。喜んで彼の家を訪ねました。玄関に入ると、部屋に通され、

彼の母や兄弟に紹介されました。そこで、私が大変驚いたのは、その家族の中で彼は特別に冷たく扱われているという事実です。母親も兄弟達も、彼にはまるで無関心であるかのように思われるのです。私は気の毒に思いました。それで、へ君の家族は、君にいつも、こんなに冷たい態度なのか」とたずねました。彼は一瞬、私が何を聞いたのかよくわからなかったようですが、へこんなもんだヨ。僕は特に冷たく扱われているとは思わないが……」という意外な返事が返ってきたのです。

「何人かの友人の家を訪ねてみて、私は初めて、私に対する母や家族の態度の方が特別であることに気づきました。私が家にいる時、私は一人にいることはほとんどありません。いつも母が側にいてくれるか、兄弟の誰かがいて、私の世話をしてくれたり、話相手になってくれたりします。私は、それまで、家族というものは誰もが私のようにしてくれるものだと思っていました。しかし、健康な人達は私のような処遇は受けていないことを知ったのです。私は小さい時から脳性マヒで、自分で自分のことが十分できません。母や兄がそれを補ってくれていました。私は、いつの間にか、家族が私のためにいろいろと世話することが当然であるかのように思っていたのです。もし、私がこんな障害をもっていなかったら、母は旅行にも行けたでしょう。自分の好きなこともやれたでしょう。ところが、一日でも旅行したり、楽しみのために家を空けたりすれば、私の世話を誰もやれるものがなくなるわけです。そのため、母は自分のことを犠牲にして、私の世話をしてくれていたのです。当時、兄弟は皆小さかったものですから、仕方なかったといえはそれまでですが、それでも、私は自分のために縛られた母をみて、とても悲しくなるのです。もっと母を自由にさせてやりたい。ほかの人達の母親や家族のように、好きなことをやってもらいたいと思うのです」。

参考文献

- Albrecht, T. A. and Adelman, M. A. (1987) "Dilemmas of supportive communication", in T. T. Albrecht et al (ed.). *Communicating Social Support*. Newbury Park: Sage.
- Granovetter, M. S. (1973) "The strength of weak ties". *American Journal of Sociology*, 78, pp. 2360-80.
- Granovetter, M. S. (1974) *Getting a Job: A Study of Contacts and Careers*. Cambridge, Mass: Harvard, U. P.
- Granovetter, M. S. (1983) "The strength of weak ties: a network theory revisited", in R. Collins. (ed.) *Sociological Theory 1983*. San Francisco: Jossey-Bass.
- Horwitz, A. (1977) "Social networks and pathways to psychiatric treatment". *Social Forces* 56, pp. 86-105.
- Litwak, E. (1985) *Helping the Elderly: The Complementary Roles of Informal Networks and Formal Systems*. New York: Guilford.
- McKinlay, J. B. (1973) "Social networks, lay consultation and help-seeking behavior". *Social Forces* 51, pp. 275-92.
- 土佐林一 (一九八二年) 『この一歩から——障害児理解のしかた——』誠信書房。
- 成富正信 (一九八二年) 「コミュニティ研究における近隣の位置——ネットワーク分析の視角から——」『社会学年誌』(早大社会学会) 二三号、一五一—六七頁。
- 成富正信 (一九八三年) 「規範と社会的ネットワーク」『早稲田人文自然科学研究』(早大社会科学部学会) 二四号、五五—七九頁。
- 成富正信 (一九八六年) 「ソーシャル・サポート・ネットワーク論序説」『社会科学討究』(早大社会科学研究所) 九二号、六一—九五頁。
- 牧里毎治 (一九八八年) 「ソーシャル・サポート・ネットワークにおけるボランティアの役割と展望」『社会福祉研究』(鉄道弘済会福祉部) 四二号、三一—六頁。